

淳はパイに首をつかまれ、持ち上げられる。そしてパイは淳の左胸に刃を突き刺した。

しかしパイの刃は確かに淳の左胸をさしていたが、その刃の先は心臓まで届いておらず、正確に言うならば、表面の皮を傷つけていただけであった。理由は簡単だ。それ以上ささうものなら、彼の肘のすぐ前に浮いているメスが腕を刺して切り裂いていたであろうからだ。

パイは左腕をぱっと離し、淳を解放する。淳は力が全く入らず、そこにたおれるが、何とか話すだけの力は戻ったのか、カツカツと靴の音を鳴らしてこちらにやってくる男に話しかけた。

「なぜ……、貴方が……」

「お久しぶりですね。淳君」

自分と淳のバッグを見つけ、そして外が騒がしいのに気づき、バッグをもってすぐに倉庫から出た雄二が見た光景は、

あの目つきの鋭く、黒い中国服を着た男と、その傍で全身を痙攣させ、さらには左の胸から血を流していた淳と、そしてもう一人。

「なんであんたがこんなところにいるんだよ」

そこにいたのは以前慎と同等に戦っていた、國生響司だった。

「これはこれは。まさか雄二君までここにいるとは」

「ホウ、お前、日本で最強とか言われてる能力者の一人、黒き帝王か。お初にお目にかかる」

「ええ、はじめまして、とっておきましようか」

「く、ろき帝王？ 黒い、闇医者じゃあ、ないんですか？」

「アア、そういえば変わったんでしたっけカ。じゃあ改めまして……。いや、もういいカ」

「淳君、私はその名は好きではありません。勿論、その男が言っていた名前もね。ですから、私のことはその名で呼ばず、普通に名前で呼んでくださいね」

窮地を何とか脱した淳だったが、しかし心が休まることはなかった。自身のピンチを助けてくれた國生は、パイと違い

殺気をほとんどまといなかつたが、しかし殺気よりもっと深い、それでいて暗くどす黒い気を放っていたからだ。

「マツタク。こいつらは極上のエサだったのですかね。おかげで違う上物がつれてしまった。まあいいカ。他の人間二手を出すなとハ言われてないし、赤い死神と戦うためのイイ試験紙となる」

「おやおや。試験紙で怪我をするのは実験者として恥ずかしいことですよ」

「ハハ。まあソウいうな。君もたぶん誰かに雇われてきているのだろう？ 君は始末屋と聞くしな。だったらお互いビジネスだ。そう、だから……」

パイはもともと笑っていた口をさらにゆがませ、

「殺しあおう」

さらなる殺気を放った。自身に向けられていなかつたからこそ、また、淳ほど近くで感じなかつたからこそ雄二は正気を保つことができたが、淳は先ほど刺されたこともあり、まじかに感じる圧倒的なその殺気に今度は先とは違った理由で震えていた。そしてその震えはいまままでの痙攣よりもとて

も大きく、彼がパイの放つ圧倒的な殺気にどれだけおびえているかを如実に表していた。もはや淳は正気を保っていることはできなかつた。

パイは目にもとまらぬ速さで國生に近づくが、しかし國生も同等の速度でパイと距離をとる。結果、両者の距離はなかなか縮まることはなかつた。

「逃げてばかりでは私には勝てませんよ」

「ええ、分かっていますよ」

國生はコートをばさりと広げ、そしてそこから大量の刃物を飛ばす。パイはこれをさらりとかわすが、しかしそれらの刃物は彼をホーミングしてきた。

「なるほど」

しかしこれにパイは動じず、またよけるといふ動作を繰り返すだけでなく、國生に近づく。國生も同時に引くが、今回はパイのほうが多く、接近を許した。と思われたが、パイは急速停止する。下から刃物が飛んできたためだ。

「ほう、いい勘をお持ちです」

「それほどでもないサ」

二人は3分もの間、そのような攻防戦を絶え間なく続けていた。雄二は目の前で繰り広げられるその攻防戦を眺めていた。とはいっても、見れていたわけではない。スピード的には何とか見えるくらいの動体視力は特訓のおかげでつけていたのだが、彼らの急激な加減速、直角に動くなど読めない軌道を描く技。それらに目が、というより意識が追いつかなかったのだ。故に彼に認識できたのは、目に偶然入ったいくつかの数フレームだけであった。この二人は別にそこまで大きな技は出していない。パイのほうはそれどころか攻撃すらしていない。避けるか、近寄ろうとするか。それだけである。しかし十分だった。雄二は彼らの動きを見て自身との圧倒的な実力の差を感じ取った。

「らちが明きませんね」

國生が言い終わる直前に、数多くの角材や木箱など倉庫の外に転がっていたものが、いっせいにパイめがけて飛んだ。かなり遠方からも飛んできており、数は百をはるかに超えていた。だがしかしこれにパイは「待っていましたよ」と微笑み、そしてこの攻撃を避けようともせず、一気に國生めがけ

て跳んだ。そう、國生は自身の攻撃に当たらないように、彼の真後ろからは物が飛んでこないような攻撃をしていたのだ。勿論、普通、どころかかなりの能力者でもこのようなことは分かる余地もないほどにたくさん物が飛んできており、そして巧妙に隠していたために、たとえばせらなかったとしてもこのような突破口を見出すことはなかなかできない。しかしパイはその弱点を見抜いた。そして大技を繰り出した國生は一瞬反応が後れ、パイは接近に成功する。右腕を思い切り引き、そしてパイは腕についた刃で國生を突き刺さうとする。

「!?!」

瞬間、パイは後方に引いた。そして次の間には國生から、否、國生のコートから彼を中心として四方八方に刃物が飛んだ。

「実に、いい反応です」

パイは後ろに引いたが、そこには当然國生が飛ばしていた多数の質量を持った物体が飛んできていた。

「くそ！ クソクソクソ」

勿論パイもこのことは知っていた。その上で瞬時に引いたのである。それほどまでに國生から飛び出していた刃物は多く、そしてパイを致死へと至らしめることが明白だったのだ。

パイはすぐさま他の穴を探すが、そんなものがないのは分かっていた。だからこそ、最も少量のダメージですむ地点にてたち構えた。だが最もダメージがすむといってもいくつもの箇所を骨折しているのは明らかだった。

「本当にいい反応でしたね。そしてすばらしい根性ですね」  
それほどのダメージを受けたのにもかかわらずパイは立っていた。が、國生が声をかけた後、数秒して崩れ去った。

「すっげえ」

雄二はものすごい大技、そしてその技がおとりであり、敵の逃げ場をなくすためのものであったことに驚いた。雄二にとってはそのような大技は敵を倒すための切り札だと思っていたからだ。そう、つまり俗に言う必殺技。しかし違った。あくまで敵を倒すための一手であり、それ自身がチェックメイトをかけているわけではなかったのだ。

「それほどでもありません。それにすごいというならば、自

身の体術のみでここまで私を追い詰めた彼のほうが凄かったですよ」

「え、追い詰めたって？ そうは見えなかったっすけど」

「いえ。もしも長期戦になっていたら私も危なかったですね」

「えー、そうは見えなかったっすよ」

「恐ろしいことに、彼は私のリズムというものを把握して来ていましたからね。だからこそ、あのような大技で一気に決めるしかなかったのですよ。本当なら何があるか分かりませんから、彼をすこしでも近づけたくはなかったですからね。とはいっても」

國生は勝利後、雄二と話す中でくすくすと笑っていたが、その笑いをぴたりと止め、「もう二度と通用しないような手ですけどね」と言い放つ。そしてたおれている彼の上に刃物を一本飛ばしてきた。

「ちよ、なにやるつもりっすか」

「決まっているでしょう。殺すのですよ」

「な！」

雄二はこの言葉に絶句する。しかし國生はさも当然のように「そうでなければまた貴方たちが狙われる可能性がありま  
すからね。ならば殺しておいたほうが良いでしょう?」と告  
げた。

「でも、だからって殺すって……」

「ほう、ならば殺さないでおきますか? 正直な話、私はど  
ちらでもいいんですよ。ここに来たのも、あくまで情報を得  
るためだけですし。私も私のクライアントもわざわざ彼を殺  
す必要なんてないんですからね。ただ、最悪貴方たちは一生  
彼から狙われることになりますけどそれでもよろしいんで  
すか?」

「いや、それは……」

雄二は悩む。しかし、もし淳ならばそこで迷わずに殺さな  
くてもいいと断言するだろうという思考にいたり、「殺さな  
くても、いいです」と返した。雄二は淳のそんな少しおろか  
とも取れる愚直さが好きであったからだ。

「あ、あー、そうだよ。淳、おい淳大丈夫か?」

そこでようやく淳のことを思い出し、彼に駆け寄る。淳は

いつの間にか気を失っていた。まだ少しからだは痙攣していたが、それももうほとんどなかった。

「少しどいてください」

雄二が駆け寄って淳の体に触れようとするが、國生はこれを止め、そして雄二に離れるよう言った。

「なるほど。先の光景や彼の体の状況を見るに、どうやらその男は電気を用いていたようですね」

「電気っすか？」

「ええ。感電しています。300ボルトくらいでしょうか。そちらの知識はあまりないのではよく分かりませんが。まあともかく一応のため精密検査をしてみましょう。大事にはなっていないかと思いますが」

「精密検査をしてみましょうって、この近くに病院あるんすか？」

「いえ、この近くに大きな病院はありません。ですので私の病院でみてみましょう」

「え？ 私の病院って？」

「おや？ 赤い死神から聞いていませんか？ 私は医者で

すよ。故に私は黒き闇医者とよばれています」

「え、あ、ええ？」

「ふふふ。さあ、いきましよう」